



さくら通信



Hoju
Group
宝樹会

No.17

2020

宝樹会によるウィーン発の浄土真宗会報誌

道を求めるころ (14)

道を求めるころ (その2) 4

岡本英夫

善知識への疑い

こうして善財童子は次々と善知識を訪ね、真実に出会うためにいかに学び、歩むべきかを問い、求道聞法の旅を続けます。その善知識は様々な人であって、男性、女性、大人、子供、出家、在家、あらゆる人が善知識になっている観があります。

十番目の善知識は方便命婆羅門（ほうべんみょうばらもん）です。この善知識は苦行を修めている婆羅門で、剣の山で修行をしている。麓には火炎が燃えさかっている。その剣の山上から火炎の中に身を投げる修行をしているのです。

そこへ善財童子が訪ねていき、いかにして菩薩の行をすればいいかを尋ねます。婆羅門は言下に、

「もしお前がこの剣の山に登り、山の絶頂から炎の中へ身を投ずるならば、菩薩のすべての行が完成するであろう」

童子は大いに驚きます。これまでこのような恐ろしい行を強いた善知識はいなかった。これは本当の善知識であろうか。善知識の姿をしている魔の仕業ではないのか。このように言って自分の求道を妨げようとしているのではないのか。童子は疑います。求道の試練に出遇ったのです。

この箇所は雪山童子の「羅刹」を連想させます。雪山童子が立ち上がった後の半偈を求めた



木のもとのお話(17) 他力本願と自力

お釈迦様も親鸞聖人も始めは自力を試みられました。しかし、どれほど厳しい修行をしても、お釈迦様の体の垢はとれなかったのです。この「垢」は「煩惱」の象徴ととれます。人間は自分の汚れと共に生きるのです。汚れを持たないような特別な人間や聖者にはなれないのです。私たちは煩惱いっぱいの人間ですが、私たちを救おうとする阿弥陀の本願の光は常にこの私たちの上に降り注がれているのです。

ところ、そこにいたのはただ恐ろしい形相の鬼の羅刹だけであったのです。まさかこの鬼が真実の言葉を説くはずがないと疑います。この疑いは私たちの道を求めての歩みの上で幾度も出てくるものではないでしょうか。

求道心をまっすぐに保ち続けることはある意味で至難のことです。出会ういろいろな人、遭遇するいろいろな出来事、それらが私の求道心を揺さぶります。しっかりしていたつもりでも、つい、それらの「魔」にやられてしまうことがあるのです。

それまでの求道心が浅いものであったということでしょう。いろいろな現実に出会い、求道心を問われ試され照らされて、次第に深く強くしなやかな求道心へと成長していくのでしよう。

疑いの心を起こした時、善財童子に語りかける者があります。まず梵天（ぼんてん）が現れ、次のように告げます。

「童子よ、決してためらってはならない。この方便命婆羅門こそ大いなる聖者である。知恵を備えすべての世界を見出している人であり、完成している人である。この善知識は、人間の貪愛（とんない）と邪見（じゃけん）を除くためにこのような恐ろしい苦行を修めているのである。」

次に大自在天（だいじざいてん）が現れ、次のように告げます。

「この婆羅門の苦行は、我々の邪見を除いて我心を離れしめ、大慈悲の心を起こさせるためである。」

他にも天人たちがやってきて、それぞれ童子に、この婆羅門は「我々に自在を教えようとしている」「我々に心身柔軟（しんしんにゆうなん）と歓喜の心を与えようとしている」「法に対して執着しない心を教えようとしている」「我々の放逸高慢を除いてくれる」「怒りの心から離れさせてくれる」「報恩のために自分の欲望を捨てて法を聞き、一切衆生を助け、菩提心を起こさしめる」等々と告げ、迷ってはならないことを教えます。

天人たちがたくさん登場します。天人とは、じつは人間の一番奥の心を象徴して表しているのだと言われます。すなわち、私の本心なのです。この婆羅門が剣の山から炎の中に飛び込めと言う。本当だろうか。このように疑う心は私の心ではあっても、まだまだ浅いところにある心なのです。この心の次元で生き方を決めてはいけません。

もっと深い、私の心の根本が何を叫んでいるのか。その声を聞かねばならない。それが、この婆羅門の教えは真実の教えであるのだ、疑ってはならないぞ、という声なのです。この声がたくさん登場するということは、私の人生における求道の旅は、簡単に歩めるものではなく、真実を疑うわが心に私自身が何度も出遇って、疑いの心の叫びをしっかりと聞き抜いていくことの大切さを説いているのではないのでしょうか。

